

ひのし 火熨斗・こて(炭火用)



火のし・こて(炭火用)／岡崎むかし館蔵



炭かご／岡崎むかし館蔵

「火熨斗」や「こて」は、現在の電気アイロンに代わる道具で、その歴史は古く、今から 1000 年以上前の平安時代から昭和初期(1930 年代)頃まで使われていました。裁縫^{さいほう}の仕上げや、洗濯物^{せんたくもの}のしわを伸ばすなど広く用いられていました。

鍋のような形をした「火熨斗」は、手に持つと適度な重さがあります。金属の器に炭火を入れて熱し、柄を持って、平らになっている器の底の部分の部分を布地の上にあて、その器の重みと、熱によってしわを押し伸ばすようにして使います。「こて」は金属部分のこて先を炭火で直に熱して使用します。笹^{ささ}の葉の形をした笹こては、先がとがっているため裁縫で細かな部分を仕上げるのに便利です。現在も同じ形の電気で熱する「電気こて」が見られます。炭火を利用する「火熨斗」や「こて」は、当然、現在の電気アイロンのような温度調整機能はないため、指に唾^{つば}をつけて金属部分をさ^{さわ}っと触ったり、頬^{ほお}に近づけて熱さの加減^{かげん}をはかり、あて布^{きりふ}や霧吹きなどを使い、布地を傷めないように使用したそうです。

また「火熨斗」は、平安時代に貴族^{ふとん}の布団を温める道具としても使用されました。古くから使用されてきた「火熨斗」も、明治時代(19 世紀末頃)にイギリスから「炭火アイロン」(西洋火熨斗)が伝わり普及したため、徐々に使用されなくなりました。